

## 令和4年度第1回伊勢原市食育推進計画策定委員会 議事録

[事務局] 健康づくり課 健康づくり係

[開催日時] 令和4年5月26日(木) 13時30分から15時00分まで

[開催場所] 伊勢原市立図書館第1・2会議室

[出席者]

1 委員 7名

2 事務局 6名

[公開可否] 公開

[傍聴者数] 0人

[審議の経過]

[配付資料]

- ・ 会議次第(委員名簿)
- ・ 資料1 伊勢原市食育推進計画策定委員会設置要綱
- ・ 資料2 第4次伊勢原市食育推進計画策定方針
- ・ 資料3 第4次伊勢原市食育推進計画骨子(案)
- ・ 資料4 第3次伊勢原市食育推進計画最終評価結果一覧
- ・ 資料5 第4次食育推進基本計画(国)内容一覧
- ・ 資料6 第4次伊勢原市食育推進計画策定スケジュール(概要)
- ・ 参考資料1 伊勢原市健康づくりに関する意識調査調査結果報告書
- ・ 参考資料2 第4次食育推進基本計画(農林水産省)
- ・ 参考資料3 第3次伊勢原市食育推進計画

### 1 開会

### 2 あいさつ

- ・ 保健福祉部 高橋健康づくり担当部長

### 3 委員及び事務局の紹介

### 4 委員長・副委員長の選出、就任あいさつ

### 5 議事

- (1) 計画策定の背景および概要について
- (2) 策定スケジュールについて
- (3) 第4次伊勢原市食育推進計画骨子(案)について
- (4) その他

(委員長)

議事の(1)「計画策定の背景および概要について」事務局から、説明をお願いいたします。

(事務局)

まず、「第4次伊勢原市食育推進計画策定方針」についてご説明します。資料2をご覧ください。

1の計画策定の趣旨ですが、国の食育基本法に基づく市町村の食育推進計画として、本市では平成21年度から「第1次伊勢原市食育推進計画」、平成25年度から「第2次伊勢原市食育推進計画」、平成

30年度から「第3次伊勢原市食育推進計画」を策定し推進しています。この計画期間が令和4年度で終了となることから、引き続き計画的に食育を推進するために、令和5年度を初年度とする「第4次伊勢原市食育推進計画」を策定します。そのため、3の計画の策定体制にもありますように、第4次伊勢原市食育推進計画策定委員会を設置し、ご意見を頂きたいと思えます。スケジュールについては後ほどご説明いたします。5の計画期間ですが、令和5年度から令和9年度までの5カ年の計画期間とします。

参考資料3をご覧ください。今年度が最終年度になっております「第3次伊勢原市食育推進計画」になります。46ページをご覧ください。基本理念「食で育むいのちときずな」を基本理念に、食育目標をテーマごとに設け、各食育事業を推進してきました。62～63ページに目標達成のための指標、64～70ページには、食育の取組事業一覧があります。これらの目標を基に、食育に取り組んできたところです。

資料4をご覧ください。第3次伊勢原市食育推進計画最終評価結果一覧になります。12の施策及び16項目の指標と目標値が設定されております。目標値と現状値を比較すると、目標を達成したものは5項目、目標には至らないが基準値より数値が改善したものは3項目、基準値より数値が後退したものは12項目でした。

参考資料1をご覧ください。こちらは昨年9月に実施した「伊勢原市健康づくりに関する意識調査」の結果報告書です。資料4の16項目の指標と合わせてご説明いたします。

資料4の中の【指標】①20歳代女性のやせの人の割合を13%以下とする目標に対して、12.8%と目標を達成しました。参考資料1の5ページをご覧ください。今回改善がみられる20歳代に対し、30歳代の女性では19.5%にのぼっており、全年代の中で一番多くなっております。

続いて②30～60歳代男性の肥満の人の割合を30、40歳代は26%以下に、50、60歳代は20%以下にする目標に対して、それぞれ34.7%、29.4%と悪化しています。参考資料1の5ページをご覧ください。40歳代だけでみると42.6%と半数近い人が肥満となっております。

③ゆっくりよくかんで食べる意識がある人の割合を50%以上にする目標に対し、前回調査より改善したものの49.7%とわずかに到達できませんでした。参考資料1の123ページをご覧ください。性・年齢別でみると年齢が高くなるにつれて意識している人が増えますが、男性の20歳代が噛む意識のない人の割合が特に多いです。124ページのBMI別で見ますと、肥満者が特に噛む意識をしていない人が多くなっています。

咀嚼について参考資料1の65ページをご覧ください。性・年齢別の「何でも噛んで食べることができ」割合は年齢と共に減り、男性は60歳代以降、女性は70歳代以降で噛めない食べ物がある状況になっています。

続いて資料4の④高齢者の低栄養傾向の人の割合を17%以下にする目標に対し、20.2%と増加していました。

⑤20歳代の朝食欠食する人の割合を15%以下にする目標に対し、男性が15.2%、女性が14.9%で女性は目標達成、男性もあと一步のところでした。参考資料1の67ページをご覧ください。朝食の頻度について性・年齢別でみると、男女とも年齢が低くなるほど朝食を毎日食べない人が増えていく傾向があります。

続いて⑥朝食を毎日食べる中学生の割合を93%以上にする目標に対し、80.4%と、5年前の8

9. 0%と比較しても低下しています。

⑦食育への関心がある20歳代の割合を男性70%以上、女性80%以上にする目標に対し、男性60.6%、女性74.5%と目標に届きませんでした。男性については5年前と比較しても低下しています。

⑧栽培・収穫・農業体験をしたことがある人の割合を75%以上にする目標に対し、67.8%でした。参考資料1の116ページをご覧ください。5年前と比較し大きな変化は見られませんでした。

⑨地場産食材を市内生産者から直接納入して、給食に使用する学校を10校継続する目標に対しては市内全校で継続できており、目標達成できました。

⑩自分だけで食事を作ることができる中学生の割合を70%以上にする目標に対して、89.7%と達成できました。一方、成人についてですが、参考資料1の95ページをご覧ください。全く作らない人は5年前20.2%だったのに対し、17.4%と減少しています。性・年齢別でみると毎日作る、または手伝う者は女性の方が多いですが、女性の中だけでみると20歳代は他の年代と比較して低くなっています。

⑪1日に1回も共食をしていない人の割合を15%以下にする目標に対し、19.4%と上回っています。

⑫朝食を一人で食べる中学生の割合を50%以下にする目標に対して、46.7%と改善しております。これはコロナ禍で在宅勤務が増えて、朝食の時間に家族がそろう機会が増えたことが推測できます。

しかし⑬夕食を一人で食べる中学生の割合を8%以下にする目標に対しては、12.6%と上回っています。

続いて⑭地域等で共食したいと思う人が共食する割合を70%以上にする目標に対しては、21.6%と5年前の62.8%から40%以上減少しています。やはりコロナ禍での調査の影響を受けたものと推測できます。

共食については、コロナ禍の中で実施した調査ということもあり、今後の当委員会の中でもコロナ禍における共食については皆さまにご意見を頂きたいと思えます。

⑮1日に2～3食は主食・主菜・副菜がそろった食事をとっている人の割合を70%以上にする目標に対しては58.1%と達成できず、5年前と比較しても5%減少しました。参考資料1の79ページをご覧ください。5年前と比較し、1日に3食ともそろう、もしくは2食はそろう人が減少し、1食しかそろわない人の割合が増えています。次のページの性・年齢別で見ますと、若い世代ほど1食しかそろわない人が多い状況です。

⑯健康のために「塩気の多いものを控える」と「あぶらっこいものを控える」ことを、心がけている人を共に50%以上にする目標に対しては、それぞれ37.1%、29.4%と達成できませんでした。5年前と比較しても、共に減少しています。それぞれの男女別、年齢別などの詳細は参考資料1の34ページをご確認下さい。以上になります。

(委員長)

ただ今、第3次伊勢原市食育推進計画最終評価結果一覧を基に、説明していただきました。皆さまからご意見・質問等がございましたら是非出していただきたいと思えます。第3次計画の5年間の中で、多くの項目について取り組んできていますが、大きい社会的な変化としては、コロナの影響が大きく出

ていることは否めないと思います。この5年間の中で、調査結果を見ると、達成できている項目があるのは、とても大きい事でしょう。それが例えば20歳代女性のやせの割合などもあるのですが、学校での取組に関しては改善した結果が出てきています。例えば、地場産物を市内生産者から直接納入して給食に使用していくのが前回10校だったのが、継続実施できています。あるいは、自分だけで食事を作ることができる中学生の割合が、目標値70%に対し89.7%まで増加しているというのは、非常に評価に値すると思います。これらの数値が伸びているのは、学校でどのような取組がなされて達成できたのか、ご意見をいただけたらと思います。

(委員)

それでは学校の現状を少しお伝えしたいと思います。まず地場産物の給食に関しましては、続けることを念頭に計画をしながらやってきました。はじめは2校から始まった地場産物の取組ですが、10校まで広げてそれを第3次計画期間内は継続するというので、生産者や農協など、沢山のご協力をいただきました。会議で検討しながら継続できたのは、本当に皆さんの協力をいただいたからです。10校と書かれておりますけれども、内容としては品目数を増やすことも取り組み始めているので、実際にはもう少し広がりがあるのかなと思います。それから、子どもが自分で料理を作ることができるかどうかという点ですが、このアンケートは実際に中学校へ食育活動に行った時に実施しているのですけれども、子どもたちは自分で料理できると思っていないことが多いです。でも、聞き取りの時にご飯は炊けるよね、みそ汁できるよねと声掛けすると、「あ、それはできるよ」と答えてくれます。じゃあそれはできるので良いよと、肯定感を持たせてあげるように声かけをさせていただきました。朝ごはんの欠食に関しては、平成20年から2～3年、重点的に実施し、かなり欠食率を下げることができました。そこから取組の継続はしているのですが、そこはやはり朝食以外にも多様な食育の取組がやってきて、しかも調査の対象は毎年変わりますので、毎年毎年言い続けなければいけないのだと感じました。

(委員長)

学校の教育の中での食育がきちんと出てきていますね。子どもたちはもともと自分たちが食事を作ることができないと思っているということがわかりました。それと同時に89.7%と改善しているのが料理コンテストが伊勢原の中で根付いてきたなという風を感じています。最初小学校だけだったのが中学校、高校にまで広がってきているということは、料理コンテストに出すために、自分で作らないといけないってということがあって、先生も学校で声掛けをして実際に家庭で作ってみるとということが自信につながり、いわゆる自己効力感が上がり、食事に対する興味関心が出てくるところにつながると思います。この5年間の、ここの中に具体的な評価の数値として出てきていないのですが、料理コンテストの参加数は増えてきていますね。それは多分先生の声掛けがずいぶんあるのだろうと思うのですが、それが市と小中学校・高校まで巻き込んだ料理コンテストが続いていくことによって、食事に対する意識が子どもたちや保護者も少しずつ変わっていくと良いと思うので、定着して欲しいと思います。

直接市内生産者から納入する仕組みがかなり整ってきたということなのでしょうか。

(委員)

仕組みはご協力により整っているのですが、生産者さんが、年数を重ねていくと年齢も増していきますので、代替えなども考えなければと感じています。

(委員長)

第4次の骨子案にもつながってるところですが、JAがかなり学校の給食にはご協力していただいていると思います。高齢化が進んで大変ですが、こういう学校の仕組みとして地産地消というのは国の食育推進計画にも入っていることから、伊勢原市としても今後も継続していきたいと思います。その現状と見通しはいかがでしょうか。

(委員)

今、生産者の高齢化が問題に上がっていたのですが、実際現状は日本全体が高齢化になっており、農家の方も高齢化していて後継者が非常に少ないという状況です。新しい方も少しずつ就農されてはいるのですが、やめていかれる方に追い付いていないというのが現状です。ただ地産地消につきましては、生産農家の方たちも高い意識を持って活動していただいています。できる限りJAとして地域の、特に学校給食等には協力していきたいというところでは、JA湘南の事業計画にも入っています。

(委員長)

ぜひ続けていかれるようにご協力をお願いします。それともう一つ、⑧のところで、農業体験をしたことがある人があまり変わっていないのですが、高齢化が進んでくると、子どもたちが農業体験をしていく場もますます減ってくるということもあるのではと思います。例えば休耕地のような場所をJAが誰かに斡旋する仕組みを作るとか、そのような取組はあるのですか。

(委員)

休耕地については、個人的にやり取りされている農家さんもあるのですが、なかなか休耕地の利用に関しては思うような数字の結果には行き着いていないというのが現状です。あとは、地域の子どもたちへの農業体験については、JA伊勢原からJA湘南に、令和元年11月に合併をした経緯がありますが、JA伊勢原の食農教育を引き継いだ形で今活動しています。地区別共同活動として、各支店を中心に学童コミュニティークラブや学校などへ農業体験の形で、取組を進めているところです。できていない支店もありますが、今後も継続して行っていくことが事業計画の中にも入っています。

(委員長)

農業は第1次産業ですが、自給率が低い日本においてはとても重要な施策の一部分ですし、伊勢原市としてみても、地場産のものを安心安全で食べていくというのはとても重要なことなので、今後も是非協力していただいて食育の一環として一緒に取り組んでいただければと思いますので、学校も是非協力していただいております。

今は改善した部分を確認しましたが、数字が下がっている部分はいくつかあり、これはやはりコロナの影響があるのかなと思います。例えば、肥満者が増えてしまったということは、在宅勤務になって運動しなくなって活動量が下がってきたのか、あるいは間食をとるようになった等の要因が考えられます。また、この伊勢原市の食育推進計画で、全てのライフステージを網羅していく中で、高齢者の重点課題でもある低栄養予防に向けた食育の推進というところでは、改善していない状況が出てきているというところが、コロナ禍でなかなか活動が思うようにいかないところがあるのかということ。そして、⑩のところの地域等で共食したいと思う人が70%以上にしたいという項目が、今回は21.6%と大幅に下がっていますが、調査した時期がコロナ禍ですので、外出や会食ができないということがあるのかと思います。現状について地域で食育活動をされていて、いかがでしょうか。

(委員)

コロナ禍において、地域活動として食育は一切できなかったのですが、今年度からようやく各公民館で皆さんに参加していただけるようになりました。しかし以前は調理実習と試食が通常の流れだったので、調理のデモンストレーションを見せるだけで、調理実習や会食は皆さんに我慢していただいて、そのままレシピをお持ち帰りいただくという短時間の講習をしています。コロナ禍で自宅などにこもっていらっしゃるので地域や友達の皆さまと公民館などで集いたいという気持ちはあって、自分が目にしないと楽しみがないようです。まだ料理はできないの、とお声がかかったりするのも現状なので、今年度料理は作れないのですが、会場に来ていただいたことによって運動になりますよと伝え、自宅に帰って私たちが考えたメニューで地場産のものを使用してお料理をするようにと考えています。

(委員長)

特に2020年には日本中ほとんどが外出を控える状態でしたが、昨年ぐらいから少しずつ活動を始め、多分高齢者の方々は、集まって作りたいのですね。作ってお弁当箱に自分が食べなければいけない量をみんなで詰めて、持ち帰って食べるということだと満足されるのでしょうか。共食の範囲をこのあと次の計画のところで少しお話をお聞きしたいと思っているのですが、この共食ができないと不満が残り、一緒に食べる、作るということでも満足していただけるのならば、今委員が言われるように一緒に作ってみんなで弁当に詰めて家に帰って、ああだったなと思い出して食べるということも可能なのでしょうか。

(委員)

持ち帰ることは、衛生面や食中毒などを考えると、実施者の立場としては難しいと思います。また参加者は和気あいあいと作って、そこで一緒に食べるというのがひとつの楽しみにもなっていると感ずず。

(委員長)

そうするとここでの共食の考え方は、一緒に作って終わりや、別々に作ってオンラインで一緒に食べるという事ではなく、一緒に作って一緒に食べるということなのですね。

(委員)

そうですね。

(委員長)

そうするとこの項目の下がっている21.6%は、本当に活動制限が解除されないと上がっていかないのかと思います。ここの共食の捉え方が色々な場面が想定できると思ったのですが、なかなか難しいですね。個室がそれぞれにないとだめだということですよ、パーティションで区切るとか。学校ではいかがですか。

(委員)

学校でもずっと調理実習が出来なかったのですが、この4月から一部解除して実施しています。ただ、条件が色々付きまして、各班の人数を少なくして班以外の人のは作っては食べてはいけないとか、規制はかけながら少しずつ前に戻すように取り組み始めたところです。

(委員長)

どこまでだったら可能なのかということ、学校等の情報を共有していただき、高齢者も、一緒に作れるところまではできるのかもしれないなと思います。加工食品などを一緒に作ってみるのも今後の方

向性としてあるのかと思いました。

他に評価が下がっている項目で、「塩気の多いものを控える」、「あぶらっこいものを控える」がありました。私が感じたのは、塩気の多いものは一体何なのかと判断基準に迷うところがあって、そこがきちんと自分で判断できる知識がないと、塩気の多いものやあぶらっこいものというところは、少し難しい聞き方になっているのかなと思っています。「塩気の多いもの」とか「あぶらっこいもの」は何かと考えた時に、家庭でもあるし、外食あるいは加工食品・惣菜を買ってくるという場面などがあると思います。家庭よりも一般的には外食の方が、味が濃いとされている中で、やはり食環境の整備は、健康日本21の第2次計画でもポピュレーションアプローチと一緒に環境整備を進めていかないといけないという中では、やはり周りの食環境というのは重要です。今、伊勢原市の商工会などの中で、例えば塩分の多いようなものとかあぶらっこいものに関しての、販売あるいは普及啓発についての取組は、これまで何かされた経緯がありますでしょうか。塩分の多いものは良くないから減塩のものを販売しようとか、これは脂質が少ないから、PRして販売していこうということが商工会の会議の中で議題に上るということはありませんか。

(委員)

商業関係・流通関係ですと、商業の部会とか工業の部会とか、そういう個別の部会があるのですが、現状では特にそうした対策はありません。

観光協会と一緒に、例えばお土産品などに対して地場産のものを使ったりするということはありませんが、特に脂質や減塩などに対してはありません。

(委員長)

では、地場産の野菜についてはJ Aと連携して野菜を使ったメニューを出していこうとか、そのようなコラボはありますか。

(委員)

J Aにも作物別の部会があり、例えば野菜部会の事務局が、地元のレストランに声かけをさせていただき、地場産の野菜を使っていただくような取組はあります。それをお土産品にしてというところまではいっていないですが、地産地消という形の中ではそうした取組もあります。

(委員長)

地元の例えば伊勢原のレストランと一緒にコラボして、伊勢原産の野菜を使用していこうというのはあるのですね。食環境の部分が色々な所が分業されているので、つながりが難しい部分もありそうですね。

商工会やJ Aの中でも色々な部会が別々に動いているようなので、そこが一体化して食育でコラボができてくると、つながりができそうに感じました。

やはり、健康に配慮したものを選ぶには、どこで何を売っているのか選べる環境を作って差し上げないと、市民も選ぶにくいところがあるので、是非環境整備という点では最前線なので、また引き続き、ご意見を伺いたいと思います。

評価の上下については、あまりこの数値に一喜一憂する必要はないのではないかと思う部分もあります。ただ、評価が上がっている部分に関しては偶然的だったのかどうかというところでは、上昇率などを見てみると、例えば学校は努力の賜だと思います。実際の取組として直結している項目が地場産物や、

中学生が食事を作ることができるというものなので、これは是非継続して行っていくべきです。下がってきた項目はコロナ禍というところがあります。コロナ禍が始まって日本国民は、多分2～3年したら終息するとか、ワクチンを打てば多分感染しないなど、淡い期待を持っていましたが、いわゆる特効薬がコロナ感染症にはまだなく、高齢者の致死率が高くなることを踏まえると、社会全体の感染状況をみていってもコロナが今後どれくらい続くか、終息にどのくらいかかるのかも予測はつきません。第4次計画においても、この下がった評価はコロナが要因だと考えても仕方ないかと思うのですが、実際の第4次計画が始まってから「コロナ禍だからできないよね」では、もう言い訳ができない状況にあるではないかと思っています。

特にコロナ感染症に対してずっと対策をされてきた保健所等の状況について、お話ししていただきたいと思います。

(委員)

今、神奈川県内でも感染者は減ってはきていますが、まだ全体で毎日1,000人～2,000人の新規感染者が継続しているような状況になっています。その中でも高齢者施設等は今も、感染者数は減少しているのですが、クラスターは起こっている状況が続いています。食育についてはここ2年ほどコロナ禍の影響でなかなか思うように食育の取組ができにくかった中で、皆さん工夫されて色々な取組をされてきたと思います。食育は一緒に作って、一緒に食べて、一緒にしゃべってというところが一番の肝なので、コロナ禍で出来なかったというのが苦しかったのではないかと思います。ただ、できなかったところの反省も必要だと思いますが、できたことから学ぶことができるのではないかと思います。コロナ禍でも工夫された取組というのを是非たくさん出していただいて、ここはこういうように取り組んでいたからうちもこうやってみようというように、情報共有するシステムができると良いと思っています。あとは⑫の朝食を一人で食べる中学生の割合が増え、コロナ禍で家族が揃ったからできたというところがあって、でも夕食は皆で食べる割合が減少してしまったという結果があるので、この要因を分析していくと、もしかしたら一緒に家族で食べることができるためのヒントが出てくるのではないかと思います。

(委員長)

ぜひ今後に向けて、この5年間でできていることとできていないことを一度整理してみて、それが今回の結果にどうつながってくるかという部分を検討していただければと思います。これを実施したら良くなった、これがうまくいかなかったからこの数値も伸びていないというところが一番重要で、それを積み上げていき、あまり一喜一憂するのではなくて、的確に、客観的に数値を見ていくという観点から検討していただければと思います。

(委員)

今委員長がおっしゃったように、第3次計画の中にも前回の第2次計画の結果が載っています。これを見ますと、数字が上がりました、下がりました、達成できましたとい、結果だけなのですね。次に第4次計画の中で第3次計画の結果を整理する時に、この資料4がまた入ると思いますが、その時には、なぜこうなったのか、コロナ禍だけが要因という訳にはいかないと思いますので、それを入れていった方が、読む側も分かりやすいと思いました。



(委員)

評価結果において、学校での取組はもちろんですが、若い世代の指標がいくつかあって、20代の女性のやせの割合や朝食の欠食の割合など改善していますが、第1次計画から食育を推進してきている中で、今の20代は10年前は10歳くらいなので、学校で取り組んできたことが、20代になっても続いているのか等、できているところもぜひ分析していただくと良いかと思いました。

(委員長)

今ちょうど若い世代の食育という視点が出ましたので、若い世代ということで、このような結果が出てきた事に関して、ご意見いただけたらと思います。

(委員)

今まで食育を受けてきて、結構内容を覚えていまして、そういう部分では積み重ねてきた部分もあると思います。一方、今回の朝食を欠食をする人の割合が改善したという点に関して思うのは、コロナ禍で大学生だと対面の授業がなくなって、朝の時間が少しゆっくりと取れるようになって、急いでいるから食べないという理由がなくなったというのもあると思っています。

(委員長)

学校での食育の成果がこうやって若い世代に徐々に表れています。

(委員長)

素晴らしいと思います。だからコロナ禍により全てがマイナスになったのではなく、在宅で通学の時間がかからないから、その間にゆっくりと朝食をたべて、コンピューターの前に座れば授業が始まるということですね。働き方改革にもつながりますが、出勤ができるようになっても大手の企業ではやはり6割は在宅でできていることはやっていく、ということがだんだん言われ、それがいわゆる厚生労働省や文部科学省が言うところの、新しい生活様式でもあり、食育推進計画もそれを踏まえて立てていく必要があります。一方、文部科学省では大学は今年度、対面とオンラインですが、来年度からは全部対面授業に戻りたいようです。そのように大学の方には通知がきていますので、そうするとまた朝食欠食率が上がるのでしょうか。このような状況から、一喜一憂する必要ないという気はするのですが、コロナ禍での良い面も出ていますね。

それでは第3次計画の今回の評価について、説明していただいて皆さまから、ご意見や課題をいただいたので、それについて事務局で検討をしていく、ということをお願いします。

それでは、議事(2)「策定スケジュールについて」事務局から、説明をお願いいたします。

(委員)

資料2に戻ります。計画の策定体制(3)計画策定委員会年間スケジュールについて説明します。資料裏面の年間スケジュールをご覧ください。策定委員会は本日を含め年3回実施の予定で、次回7月は本日頂いたご意見を基に計画の素案を、3回目の10月は計画最終案についてご意見いただく予定となっております。その後最終案についてパブリックコメントを12月中旬から1ヶ月間募集し、その後修正・調整をしながら3月には製本の予定となっております。資料6でさらに詳細が載っておりますのでご参照ください。

続きまして議題(3)「第4次伊勢原市食育推進計画骨子(案)」についてご説明いたします。

資料3「第4次伊勢原市食育推進計画骨子(案)」をご覧ください。

こちらが計画の骨子（案）になります。

1. はじめには、計画策定の趣旨や背景、位置づけ等の計画について説明します。
2. 伊勢原市の食に関する取組では、第3次伊勢原市食育推進計画期間の5年間で取り組んできた食育関連各課や各関係機関で行われている食育取組の紹介や、この後ご説明する国の第4次食育推進計画で新たに重点事項とされた「新たな日常」に対応した食育取組について紹介したいと思います。例えば動画配信による講座の紹介などを考えています。委員の皆様からも是非ご紹介いただければと思います。
3. 伊勢原市の食を取り巻く状況では、市の現状として、国勢調査等から市の少子高齢化の状況や、先ほど説明しました市健康づくりに関する意識調査結果を中心に現状の説明をしていきます。前計画で示した項目に加え、SDGsに関する取組や産地、環境を意識した消費、災害時への食の備え等に関するデータも示していきたいと思っています。食をめぐる課題としては、先ほど資料4の説明でもお伝えしましたが、改善が見られなかった項目などをポイントに壮年期男性の肥満や若い世代の食育への関心、農業体験の有無、コロナ禍における共食、主食・主菜・副菜がそろった食事、塩分や脂肪分への配慮、高齢期の低栄養傾向について等の課題について整理していくことを考えております。
4. 伊勢原市がめざす食育の方向と考え方については、(1)の基本理念についてですが、第3次食育推進計画の基本理念は踏襲しつつ、若い世代や壮年期、高齢者等における食の課題にも現状を合わせて対応した内容にしたいと思います。(2)食育目標と基本施策のなかでは、前計画の評価と国の計画の考え方を踏まえ、食育目標を設定し、また市健康づくりに関する意識調査結果等を基に、適正体重の維持、若い世代や働き盛り世代への食育、生活習慣病予防の充実など、重点プロジェクトを設定したいと思います。これらを踏まえて、(3)計画体系(4)評価指標 を作成していければと思います。
5. 食育推進の施策展開として、施策の具体的な取組、施策に基づいた事業一覧など具体的な内容を入れていきます。
6. ライフステージごとの目標と取組の中で、乳幼児期、学童期、思春期、青年期、壮年期、高齢期と、ライフステージで分け、それぞれに目標や取組の設定をしていきたいと思っています。最後に、7. 計画の推進体制をまとめとしております。

先ほどの意識調査結果も踏まえ、第4次伊勢原市食育推進計画策定のポイントとしては、「若い世代を中心とした食育の推進」として、思春期から壮年期世代を中心とした食育の推進、「適正体重の維持につながる食育の推進」として、壮年期男性肥満や高齢者の低栄養予防、「健康寿命の延伸につながる食育の推進」として「主食、主菜、副菜がそろった日本型食生活の実践」、「減塩や適正な脂質バランス等生活習慣病予防に向けた食育の推進」、「高齢者への食育の場づくりを推進」を考えております。

資料5「第4次食育推進基本計画(国)内容一覧」をご覧ください。令和3年度からスタートしている、国の第4次食育推進基本計画の一覧になります。資料の左上に記載してあるとおり、3つの重点事項として、伊勢原市でも重点プロジェクトとしてあげております、健康寿命の延伸につながる(1)生涯を通じた心身の健康を支える食育の推進、そして、(2)持続可能な食を支える食育の推進、(3)「新たな日常」やデジタル化に対応した食育の推進などがあがっております。これらをSDGsの考え方を踏まえ、相互に連携して食育を総合的に推進していくとあります。

具体的事項として新たにコロナ禍において、在宅時間を活用した食育の推進や「新たな日常」やデジタル化に対応した食育、また災害時に備えた食育の推進、持続可能な食につながる環境に配慮した消費の

推進等があげられています。これらの国の計画を踏まえ、伊勢原市で課題になっている部分と連動させながら、市の食育推進計画を作成していく予定です。参考資料2は国の計画の概要版になりますので、ご確認ください。

(委員長)

本日の委員会で皆様方に最終的に承認いただきたいのが、この資料3の、伊勢原市食育推進計画の骨子(案)になります。今、事務局から説明していただいたこの骨子案については、計画の目次に当たる部分が、今説明していただいた骨子(案)が基本になっていくわけです。実際にできあがってくる第4次の食育推進計画は、この骨子に肉付けをしていく形かと思います。その中で特に重点的に考えていくべきものが、この骨子(案)の中の作成ポイントというところです。先ほど皆さんに議論していただいた前計画の評価の部分も踏まえて、新しく重点プロジェクトとして、一つ目が若い世代に対して食育をどうするのか、特に思春期から壮年期世代の食育。次が適正体重の維持につながる食育、若い世代のやせを含むのですが、特に高齢化が進む日本においては伊勢原市も同様でその高齢者の低栄養の部分と、壮年期におけるいわゆる働き盛りの男性の肥満が多いという報告がありますので、そのこのところについてどうするのか。最後に平均寿命の延伸ではなく健康寿命の延伸、これは国の施策にもつながる部分ですが一番根幹になる部分で、この健康寿命の延伸につながる食育の取組として、ここに挙げられているのが、一つ目が主食・主菜・副菜がそろった日本型食生活の実践です。二つ目が減塩や適正な脂質バランスで生活習慣病をどう防ぐか、最後に高齢者への食育として、どのようにフレイル予防を行い介護予防に進めていくか、というところを大きな柱とする旨、事務局から説明していただきました。今ここで骨子(案)として挙げられているものについて、今回の第3次計画の評価も踏まえながら、こういう観点も少し入れた方が良いのではないかとか、こういう表現の方が良いのではないかとか、あるいは感想でも構わないので、皆さま方からご意見をいただきたいと思います。基本的な骨子(案)になるので、具体的な詳細や取組については、次回皆さま方にご意見を頂戴することになると思うのですが、全体的な枠組みについてご意見をいただきたいと思うのですがいかかでしょうか。

(委員)

骨子(案)の中にある計画作成のポイントについてですが、若い世代を中心とした食育の推進という項目があり、この中に思春期から壮年期世代を中心とした食育推進というのがあります。また、6のライフステージ毎の目標と取組の中で、それぞれ分かれているのですが、思春期から壮年期ですと13歳～64歳までと年齢の幅が非常に広がってしまっていて、タイトルが「若い世代」で良いのかと感じました。壮年期を卒業しそうな年代も、「若い世代を中心とした」の中に入れて、少しイメージと違うように感じますので、プロジェクトの中で分けるか、あるいはタイトルを変更する方が良いかなと思いました。

(委員長)

まず計画策定のポイントのところにてできている3つは新たに加えるということによろしいですか。

(事務局)

前計画重なってくる部分もあると思いますが、あくまで、現状値が改善していなかったところはやはり継続して力を入れていかなければならないということで、この3点にまとめさせていただいておりま

す。前計画でも重点目標だったものもありますので、より力を入れて工夫をしながら継続していくという形です。

(委員)

大きいタイトルで「若い世代」の中に壮年期はもともと40歳～64歳と幅広いのですが。

(委員長)

やはり若い世代というと思春期から青年期くらいというイメージを受けるので、検討をお願いします。

(事務局)

表現や区分けについて検討します。

(委員)

策定のポイントや骨子(案)のアウトラインについては、これで良いかと思うのですが、災害に備えたとか食生活やSDGs等、国の第4次食育推進基本計画の中に今回新たに含まれた項目は、重点目標のどこに含まれてくるのでしょうか。

(事務局)

市の次期計画には入れていきたいと考えています。一方、伊勢原市も高齢化は進んでいて、3人に1人が高齢者になるという状況もあって、伊勢原色を特に考えるとやはりこの3つの方向が重点目標になるのかなとは思っています。重点目標にまではいかななくても、災害への備えや新たな日常に対応した食育については、入れていきたいと思っています。

(委員長)

国の計画に入っている、災害時に備えた食育の推進というのは、伊勢原市では他の部局で対応している部署があるのでしょうか。

(事務局)

危機管理課の担当にはなりますが、市の栄養士のほうでも災害時の栄養士マニュアルは作成して、統一見解を持つようにしています。今回の意識調査の中でも、災害時の備蓄をどれくらいしているのかという内容について、5年前と今回も取れていますので、どの目標の中に入れるというのが難しいところではありますが、備蓄の普及を進めていこうという施策を国の第4次計画に沿って、いずれかに入れていこうと考えています。

(委員長)

確かに近年地震や豪雨などの自然災害が多く発生してきていますので、この観点はやはり必要ですね。特に今世界中で色々な戦局が変わってきているということもありますので、そういうことも含めての災害時なのでしょう。国の第4次食育推進計画ではいわゆる新しい生活様式と呼ばれているものにシフトしているようですが、その形の表現が資料3「新たな日常に対応した食育の推進」という表現で、基本的には小学校の取組として挙げられていますね。なお、国の計画では例えばワークライフバランスの在宅時間を活用したものなども入っているのですが、例えば伊勢原市民の方がどれくらい在宅ワークをしているのかという把握が少しできると良いのではと感じました。

伊勢原市の方は、神奈川県内か東京辺りに通勤などされる方が多いかと思うのですが、それがワークライフバランスとして少し働き方が変わってきているという状況があるとするならば、それを踏まえた上での食育の展開はやはり考えたほうが良いと思うので、どこかで、何か分かるものがあればと思いま

す。自宅での料理や食事が増えてきているようなので、家族で料理をするなど食育をうまく進めていくことができると思います。国の計画で職場における従業員の健康に配慮した食育の推進が、これは新しく職域における食育としてあがっていますが、神奈川県内の保健所などでは職域の新しい食育の取組は出てきているのですかね。

(委員)

保健所でも数年前から職域では、事業所に向けた食育に取り組んでいまして、給食施設を持っている事業所に対して、スマイルスリーという主食・主菜・副菜を揃えた健康的な食生活を普及啓発しています。管内で35施設に案内をして9施設から依頼をいただいています。ただ、昨年度はコロナ禍だったので講演会等ができなくて、資料提供という形で動画データをお送りして周知していただくということに取り組んでいます。伊勢原市内では4事業所から依頼があったということを知っています。

(委員長)

伊勢原市でも4事業所あるということは、そこで行った活動について評価できるので、このあたりも少し加えて考えても良いと思います。それから、国の計画の中で地域における食育の推進として、子供食堂が挙がっていますが、伊勢原市ではいかがでしょう。地域の食育ボランティア活動の中で子供食堂と関わりがありますか。

(委員)

子ども食堂に私たちは関わってはいないです。

(委員長)

色々な課題があるとは思いますが、子ども食堂を上手く活用できれば、とても良い食育になるし、地域の食育ボランティアの皆さんの良い活動の場にもなるかと思いますが。伊勢原市内に子供食堂はあるのですか。

(事務局)

そうですね。フードドライブなどと連携したことを行っているようです。

(委員長)

災害時の項目などと合わせて情報を集めても良いかと思いました。必ずしも国に従うという必要はなくて、伊勢原市らしい食育推進計画を立てることができればと思いますが、全体的な方向性として考えていく時には、記載の有無は別として事務局で少し資料を集めて情報を整理し、次回最終的なところはまた議論させていただいたら良いと思います。また国の計画において食育のデジタル化への対応があがっておりますが、具体的には特に小学校などは動画など作っていらっしゃるのでしょうか。

(委員)

はい、動画の作成や配信も行っています。授業の中でもITを活用するというので、どんどん進んできているので、私たちも食育の内容を取り込んでできるようにしていこうとは思っています。今回の計画でもデジタル化を取り込んでいくのだと思いますが、年代によってそうしたものが得意でない年代があると思うので、ライフステージ毎にどのようなツールを使って食育をするのかということも考えていただけたらと思っています。

(委員)

神奈川県も第4次食育推進計画を国の計画を基に現在策定されていると思うのですが、前計画では神

神奈川県独自の言葉が入ってきたりしてしまいましたので、こういった情報も収集していただいて、伊勢原に合うところは取り入れていただきたいと感じました。

(委員長)

そうですね。国があって県があって市町村なので、神奈川県版も今策定中ということなので、そうした情報も少し集めていただいて整合性をとり、表現のところなど整理をして頂ければと思います。

(事務局)

神奈川県の計画と同じ年度で改正になっているので、同時並行に整理していきます。

(委員長)

それでは、この基本的な骨格としての骨子（案）に関しては、今ご意見をいただいた箇所に関して、事務局で検討させていただくという形にした上で、皆さまから了承をしていただければと思いますがいかがでしょうか。

了承いただきありがとうございます。それでは皆さま方から了承していただきましたので、今いただいた先生方からのご意見は事務局で整理をしていただいて、また次回報告という形にさせていただければと思います。

この委員会は全部で3回開催される予定で、次回が7月でございます。最後の10月開催の段階では計画が概ね出来上がるという形の、結構短い期間で集中的に策定していくというスケジュールになっています。次回までに皆さま方からはこの骨子案について、気がついたところがありましたら、早めに、事務局にご連絡していただければと思います。またこの骨子（案）に基づいて、もう少し詳しく内容についても策定していく中で、その時に皆さま方から、具体的なこういう取組が良いのではないかとといったご意見をいただけたらと思います。皆さまのお仲間、職域の方々などと情報を共有していただきながら、伊勢原市の食育推進計画に盛り込んでいくこ具体的な取組について、新たな日常を踏まえた上ではありますが、こうした点を取り入れていくとより進むのではないかなど、情報を集めていただいて第2回の策定委員会に情報提供をしていただけると、議論が進むと思いますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

これで本日の議題はすべて終了させていただきます。

(事務局)

以上で、本日予定していた案件はすべて終了いたしました、委員の皆様、ありがとうございました。